

琉球大学学術リポジトリ

沖縄語宜野座惣慶方言の名詞の格

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学島嶼地域科学研究所 公開日: 2020-09-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ハイス, ファン デル ルベ, Giis, van der Lubbe メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/46728

【研究論文】

沖縄語宜野座惣慶方言の名詞の格

ハイス・ファン＝デル＝ルベ※

Case Marking in Ginoza Sokei Okinawan

Gijs van der Lubbe

要旨

本稿では、沖縄語宜野座惣慶方言を対象に名詞の格形式体系の記述を行なった。属格には、はだか格、*ga* 格、*nu* 格の3つの形式が用いられ、その使い分けは、名詞の有生性階層によると考えられる。もっとも有生性が高い名詞は、はだか格をとり、それより有生性が低い名詞は、*ga* 格をとり、もっとも有生性が低い名詞は、*nu* 格をとる。また、*gatʃi* 格、*ttʃi* 格、*ni* 格、*nike* 格の意味用法の共通点と相違点を記述していった。*gatʃi* 格と *ni* 格と *nike* 格が3つともありかをあらわしうるが、*gatʃi* 格は、存在動詞 *un* 「いる」と *an* 「ある」と共起しない。

Abstract

This study is a description of the case marking on nouns in Ginoza Sokei Okinawan. The zero-marker, *ga*, and *nu* are used as genitive case markers, and which one of them is used depends on the animacy of the noun they attach to. Nouns with high animacy take the zero-marker, nouns with lower animacy take *ga*, and the nouns with the lowest animacy take *nu*. The differences in use and meaning between the markers *gatʃi*, *ttʃi*, *ni*, and *nike* have been described as well. *gatʃi*, *ni*, and *nike* all mark a place of existence, but *gatʃi* never occurs in sentences headed by the verbs of existence *un* ‘to exist (animate)’, and *an* ‘to exist inanimate’.

はじめに

沖縄語宜野座惣慶方言は、宜野座村字惣慶で伝統的に話されている言葉である。惣慶方言は、その地域で非常に独特な方言として知られている。惣慶方言の先行研究としては、屋比久浩（1962）と（1964）がある。

現在宜野座村字惣慶では、2つの言語シフトが同時におこりつつある。1つは、伝統的なスーキクトゥバ（惣慶方言）からいわゆるカイクトゥバ（首里那覇言葉をベースとする

※ 琉球大学島嶼地域科学研究所ポスドク研究員

Postdoctoral researcher, Research Institute for Islands and Sustainability, University of the Ryukyus.

‘沖縄語共通語’)へのシフトであり、もう1つは、広い意味での沖縄語から日本語へのシフトである。60代以上の方は、日常的に沖縄語を使用しているが、惣慶方言的な要素が相当薄くなっているため、惣慶方言が琉球諸語の中でもっとも危機に瀕している言語の1つであると言ってよからう。

本稿の資料は、著者が現地調査によって得たものである。インフォーマントは、YS (1935 男性)である。今の段階では、名詞の文法的な形を網羅的に記述することはできないが、現在までに調査で得た資料に基づいて、分かることを述べる。

惣慶方言の名詞の格形式一覧

惣慶方言には、句の中の統語論的、意味的、そして語用論的な役割をあらわす形態論が助詞の形で発達しているが、助詞がついていない、いわゆるはだかの形も格をあらわすことがある。惣慶方言には、すべてあわせて、はだか格、ga 格、nu 格、gatji 格、ttji 格、tji 格、Ndzi 格、ni 格、nike 格、ka:格、gare 格、tu 格、kka 格の13の格形式がある。それぞれの格形式をとった名詞の文法的な意味をまとめると、表1のようになる。

表1. 正名方言の格形式

		用例
はだか格	対格	kissa <u>kurubu</u> kadaN さっきミカンを食べた
	主格	unesu=ga <u>muN</u> ippe: tʃirakatoN 彼らのものがたくさん散らかっている
	側面	e:=ja <u>taki</u> takahagutu 彼は背が高いから
	時間格 時間的空間	<u>uttʃi:</u> <kutʃo:>=tu itataN 一昨日区長と会った
ga 格	主格	ki:=nu <u>ʃa:=ga</u> kaitaN 木の 葉が 枯れた
	側面	jaka=ja <u>sura=ga</u> su:=nike nitoN お兄さんは顔がお父さんに似ている
	属格	<u>unesu=ga</u> muN 彼らのもの
nu 格	属格	<u>uttu=nu</u> <kabaN> 弟のかばん
	主格	<u>nusudu=nu</u> iʃigaki sukkitʃi hiNdzitaN 泥棒が石垣を飛び越えて逃げた
gatji 格	方向格	kudu take: <u>naha=gatʃi</u> idaN 去年 二回 那覇に 行った
	与格 相手	kunu hana=ja <u>tudzɪ=gatʃi</u> jasun この 花は 妻に あげる

	所格 ありか	e:=ga <u>naka=gatfi</u> ittonu hadu あれの中に 入っている はずだ
ttfi 格	方向格	<u>da=ttfi</u> ituga? どこに 行くか?
tji 格	具格 道具	<φude>= <u>tji</u> dzi: katfi jibirahaN 筆で 字を 書いて かつこいい
	具格 手段	nama <u>kuruma=tji</u> taN 今 車で 来た
	具格 素材	muka <i>fi</i> =ja ja:=ja <u>ki=tji</u> sokototaN 昔は 家は 木で 作っていた
Ndzi 格	所格 動作や状態がなりたつ所	<u>kunu</u> jigutu=ja ja:= <u>Ndzi</u> =N naruN この 仕事は 家でも できる
	時間格 時間状況	<u>kinu</u> =Ndzi susu jotamu naraNtaN 昨日のうちにするつもりだったができなかった
ni 格	所格 ありか	taro:=ja <arudzeNt <i>fi</i> N>= <u>ni</u> nageheku utegutu 太郎はアルゼンチンに長らくいたから
	時間格 動作や状態がなりたつ時	e:=ja <jodzi>= <u>ni</u> sunu hadu=do: 彼は 四時に 来る はず だよ
	因格	<u>kadziφut<i>fi</i>=ni</u> utfitonu kurubu 台風に 落ちている ミカン
nike 格	所格 ありか	ata=ja ja:= <u>nike</u> moruna? 明日は家に おられますか?
	所格 くっつける所	<u>bodu=nike</u> sadzi matoN 頭に タオルを 巻いている
	受身の相手・動作の主体	so:ro:=ja <fo:doku>= <u>nike</u> sattfi ... アブラゼミは、消毒にやられて...
	関係の相手	sura=ja <u>su:=nike</u> nitfuwaN 顔は お父さんに 似ていない
ka: 格	奪格	e:=ja <u>nuda=ka:</u> taN 彼は 宜野座から 来た
	所格 経由点	kutja=gatfi ikinija <u>nuda=ka:</u> ituN 松田に 行ったら宜野座を通っていく
	時間格 はじまる時	so:ro:=ga <u>akatut<i>fi</i>=ka:</u> natotaN アブラゼミが暁から 泣いていた
	材料	kunu saki=ja <u>kumi=ka:</u> sokoruN この 酒は 米から 作る
	相手	<u>udzasa=ka:</u> dziN jitaN おじから お金を もらった

gare 格	到達格 空間	kaNna=gare idzi kwe: 漢那まで 行ってこよう
	到達格 時間	juru <dzu:dzi>=gare <beNkjo:> sa: 夜 十時まで 勉強を しよう
tu 格	相手	uttfi: <kutfo:>=tu itataN 一昨日区長と 会った
	共格	kunu kwafi=ja jattu=tu maNdena tagidoiwa この お菓子は家族と一緒に 召し上がれ
kka 格	比格	e:=ga ja:=ja wa: ja:=kka mageheN 彼の 家は 私の 家より 大きい

1. はだか格

はだか格は、名詞に助詞がついていない語形である。これには、対象（対格）、動作主や状態の持ち主（主格）、側面、属格などのようなさまざまな文法的な意味がある。

次の用例は、対格としてのはだか格をしめす。日本語の「を」に相当する格助詞がなく、対格をしめす助詞が惣慶方言にない。

- 1) su:=ga bodu uttfi, janagutfi anirutaN
お父さん 頭を 打って 悪口を 言った。
- 2) menatfi <maNgwa> judzi attuN
毎日 漫画を 読んでいる
- 3) kissa kurubu kadaN
さっき ミカンを 食べた
- 4) wanu tasukitfi satagutu, kwafi tagirasuN
私を 助けてくれたから お菓子を 差し上げる
- 5) nusudu=nu ifigaki sukkitfi hiNdzitaN
泥棒が 石垣を 飛び越えて 逃げた

動作主や状態の持ち主をあらわす主格でもはだか格があらわれる。

- 6) unesu=gga muN ippe: tfirakatoN
彼らの 物が 一杯 散らかっている
- 7) tfu: wanu itunahaN
今日 私が 忙しい

次の用例では、はだか格の名詞が主語である人の部分などの側面をあらわす。

- 8) e:=ja taki takahagutu, kogu magatfi ja:=gatfi iraNdoniwa bodu uttuN
彼は 背が 高いから しゃがんで 家に 入らなければ 頭を 打つ

動作や状態がなりたつ時をあらわす名詞 uttfi: 「一昨日」などにも助詞がつかず、はだか

格で用いられることがある。

- 9) uttfi: <kutfo:>=tu itataN
一昨日 区長と 会った

動詞 narun「なる」や nasun「為す・～にする」などのような単語と組み合わせることで述語の要素もはだか格であらわされる。

- 10) Nmai=ja jima jomu, nageheku naha=nike utegutu, nahattu natoN
生まれは 島 だが ながらく 那覇に いたので 那覇人になっっている
- 11) <ko.miNkwaN> kufi nafinija <ge.tobo.rudzo:>=ga aN
公民館を 後ろにしたら ゲートボール場が ある

はだかの形は、有生性の高い代名詞の場合、属格として用いられ、所有者や属性をあらわす。saru「だれ」と wanu「私」は、名詞述語や目的語などとしてあらわる場合に、変化せずにあらわれるが、連体修飾語として用いられる場合、助詞は、つかないが、形式が変化し、sa:「誰の」と wa:「私の」になる。用例(15)で示しているように、この形式は、格助詞 ga を受ける形式にもなる。

次の用例は、所有者としてのはだか格の用例である。

- 12) e:=ga ja:=ja wa: ja:=kka mageheN
彼の 家は 私の 家より 大きい
- 13) e:=ja sa: mu joga?
彼は 誰の 物 なのか?

waha「私達(除外)」、aga「私達(包括)」、ja:「あなた」、i:「あなたたち」、naha「あなた様方」、または、複数接尾辞-ta:「～たち」は、変化せずに、助詞がつかない形で属格として用いられてる。

次の用例は、属性をあらわすはだか格の用例である。

- 14) waha inaguNgwa=ja tfin=gatfi utu muttifi idagutu, ittemi sabisaN
私達の 娘は 金武に 夫を持って行ったから¹⁾ 少し さびしい

2. ga 格

ga は、主格や、述語にさしだされる特性を持つ主語の側面や、属格をあらわす。

動作や状態の持ち主をあらわす主格としての ga 格は、次のとおりである。

- 15) nimutu wa=ga muttuN
荷物を 私が 持つ
- 16) ki:=nu fa:=ga kaitaN
木の 葉が 枯れた
- 17) ituku=ga jama=gatfi samunu suiga idaN

いとこが 山に 薪を とりに行った

次の用例では、ga 格の名詞は、述語の側面をあらわす。

- 18) jaka=ja sura=ga su:=nike nitoN
お兄さんは 顔が 御父さんに 似ている。

有生性の高い、代名詞の一部（二人称敬称、3 人称・指示代名詞）、肩書き、親族呼称、固有名詞（人名）において所有者、属性、内容の指定をあらわす属格として用いられる。

次の用例は、ga 格の名詞が所有者をあらわす。

- 19) aNma:=ga kwi:=nu fikarutaN. wanu judonu hadu
お母さんの 声が 聞こえた。私を 呼んでいるはずだ。
- 20) e:=ga ja:=ja wa: ja:=kka mageheN
彼の 家は 私の 家より 大きい
- 21) unesu=ga muN ippe: tʃirakatoN
彼らの 物が 一杯 散らかっている
- 22) nami=ga ja:=ru jukuN mageheN
あなた様の 家が さらに大きい

次の用例では、ga 格の名詞が内容の指定をあらわす。

- 23) e:=ga naka=gatʃi ittonu hadu
あれの中に 入っている はずだ

3. nu 格

nu 格は、主格と属格をあらわし、その分布が ga 格と重なっているが、属格をあらわす場合に、ga に比較すれば、もっと有生性が低い名詞につく。

次の用例では、nu 格の属格の名詞が所有者をあらわす。

- 24) kwi:=ja uttu=nu <kabaN> joN
これは 弟の かばん だ

次の用例では、nu 格の属格の名詞が所属をあらわす。

- 25) <jodzɪ>=ni <gakko:>=nu <seNse:>=gatʃi itaiga ituN
四時に 学校の 先生に 会いに行く

次の用例では、nu 格の名詞が内容の指定をあらわす。

- 26) hafiru=nu ʃita=ka: aiko=ga ittʃi taN
雨戸の 下から アリが 入って来た

nu 格は、動作や状態の持ち主を含む主格としてもあらわれるが、面接調査においては、

用例が得にくかった。平安座方言（當山 2015 : 52）、今帰仁謝名（島袋 2015 : 207-208）、恩納村名嘉真方言（仲間 2015 : 220）などの沖縄語の他の諸方言においても主格としての nu 格の使用が広く見られるため、かつて惣慶方言においても nu 格が現在よりも主格としても用いられていたが、その位置には、ga 格の使用が広がってきたと考えられる。

次の用例は、nu 格の主格としての使用の用例である。

- 27) nusudu=nu iʃigaki sukkitʃi hiNdzitaN
 泥棒が 石垣を 飛び越えて 逃げた
- 28) <ija>=nu aNtaN-nettʃi kusui numaNdoniwa noraN=do:
 医者が 言ったように 薬を 飲まなければ 治らないよ

4. gatʃi 格

gatʃi 格は、移動動作の方向（行先）、授受の相手、ありか、述語の要素をあらわす。

次の用例は、gatʃi 格の行先としての用例である。

- 29) kudu take: naha=gatʃi idaN
 去年 二回 那覇に 行った
- 30) ituku=ga jama=gatʃi samunu suiga idaN
 いとこが 山に 薪を とりに 行った

次の用例では、gatʃi 格が動作の相手をあらわしている。

- 31) kunu hana=ja tudzɪ=gatʃi jasuN
 この 花は 妻に あげる
- 32) aNma:=gatʃi suN=tʃi anitana?
 お母さんに 来ると 言ったか？
- 33) <seNse:>=gatʃi nu:-jotʃiN sutu kotʃi muttʃi ikiwa
 先生に 何か お土産を 買って持って行きなさい

gatʃi 格は、ありかもあらわすが、aN「ある」uN「いる」の存在動詞とは、共起不可能である。

次の用例は、gatʃi 格がありかをあらわしている用例である。

- 34) e:=ga naka=gatʃi ittonu hadu
 あれの中に 入っている はずだ

gatʃi 格は、動詞 naruN「なる」が組み合わせさって、連語述語の要素となる。naruN「なる」がはだか格と連語述語になる場合もあるが、gatʃi 格がその中の変化が大きいことをあらわすために用いられているようである。

- 35) muru kaikutuba=gatʃi nataN
 全部 借り言葉²⁾に なった

5. ttʃi 格

ttʃi 格は、方向をあらわし、場所をあらわす疑問詞 da: 「どこ」や場所をあらわす指示代名詞 kuma 「ここ」、Nma 「そこ」、ama 「あそこ」にしかあられず、gatʃi 格の異形態素であると考えられる。重野&白田 (2016 : 122) によると、奄美与路島与路方言において方向格助詞 katʃ (重野&白田の書き方で「kach」) は、母音に後接する環境で ka が脱落することである。与路方言の katʃ と惣慶方言の gatʃi が同根語であるため、かつて惣慶方言においても母音に後接する環境における ga- の脱落が生産的であった可能性がある。

指示代名詞 kuma 「ここ」の場合は、kuma=ttʃi 「ここへ」を kuma=gatʃi 「ここへ」に置き換えることは可能であるが、da: 「どこ」の場合は、*da:=gatʃi 「どこへ」が非文法的と判断され、da=ttʃi 「どこへ」のみが用いられる。

36) da=ttʃi ituga?

どこへ行くか?

6. tʃi 格

琉球諸語において共通している特徴の一つは、「する」に相当する動詞の中止形が文法化して、格助詞として道具や手段、材料などをあらわすことである。惣慶方言では、それは、suN 「する」の中止形 tʃi である。

次の用例では、tʃi 格が道具をあらわしている。

37) <ϕude>=tʃi dʒi: katʃi ʃibirahaN
筆で 字を 書いて かつこいい

次の用例では、tʃi 格が手段をあらわしている。

38) nama kuruma=tʃi taN
今 車で 来た

次の用例は、tʃi 格の材料としての使用の用例である。

39) mukʃi=ja ja:=ja ki:=tʃi sokototaN
昔は 家は 木で 作っていた

7. Ndʒi 格

Ndʒi 格の名詞は、動作や状態がなりたつ場所や時間状況をあらわす。格助詞 Ndʒi は、「行く」に相当する動詞の中止形に由来するが、惣慶方言においては、「行く」は、ituN であり、その中止形は、idʒi 「行って」である。そのため、格助詞 Ndʒi は、他方言からの借用であると考えられる。

次の用例では、Ndʒi 格の名詞が動作や状態がなりたつ場所をあらわす。

40) kumu ʃigutu=ja ja:=Ndʒi=N naruN
この 仕事は 家でも できる

次の用例では、Ndzi 格の名詞が時間状況をあらわす。

- 41) kinu=Ndzi susu jotamu naraNtaN
昨日のうちにするつもり だったが できなかった

8. ni 格

ni 格には、所格（ありか）、時間格（動作や状態がなりたつ時間）、因格（原因）という用法が確認できている。

次の用例では、ni 格の名詞がありかをあらわす。

- 42) taro:=ja <arudzeNtʃiN>=ni nageheku utegutu <supe:Ngo> sesuN
太郎はアルゼンチンに 長らく いたから スペイン語ができる

次の用例では、ni 格の名詞が動作のなりたつ時間をあらわす。

- 43) e:=ja <jodzi>=ni sunu hadu=do:
彼は 四時に 来る はずだよ

次の用例では、ni 格の名詞が原因をあらわす。

- 44) kadzifutʃi=ni utʃitonu kurubu ʃuiga idzi ku:
台風に 落ちている ミカンを 拾いに行ってい

9. nike 格

nike 格の名詞は、所格（ありか、くっつける場所）、受身の相手・動作の主体、関係の相手をあらわす。

次の用例では、nike 格の名詞がありかをあらわす。このような場合は、nike 格を ni 格に置き換えることが可能である。

- 45) ata:=ja ja:=nike moruna?
明日は家に おられますか？

次の用例では、nike 格の名詞が受身の相手・動作の主体をあらわす。

- 46) mukafi:=ja so:ro:=ga akatutʃi=ka: mitahanu saku=N natotamu
昔は アブラゼミが暁から うるさいぐらいも 泣いていたが
nama:=ja <ʃo:doku>=nike sattʃi nakaN natoN
今は 消毒に やられて 泣かなく なっている

次の用例では、nike 格の名詞が関係の相手をあらわす。

- 47) sura:=ja su:=nike nitʃuwaN
顔は お父さんに 似ていない

次の用例では、nike 格の名詞がくっつける所をあらわす。

- 48) haru=Ndzi ʃigutu toini:=ja bodu=nike sadzi matoN
畑で 仕事をしている時は頭に タオルを 巻いている

10. ka:格

惣慶方言の ka:格の名詞は、奪格（出所（49）、とりはずす所（50）、出発場所（51））、材料（52）、手段（53）、所格（つりうごく場所）（54）、時間格（動作や状態がはじまる時）（55）、相手をあらわす。

- 49) kunu ifi=ja fitto=ka: utfitfi taN
この 石は 空から 落ちてきた
- 50) limu=ka: tfuka: muttifi kwa
台所から 急須を 持ってこい
- 51) e:=ja nuda=ka: taN
彼は 宜野座から 来た
- 52) kunu saki=ja kumi=ka: sokoruN
この 酒は 米から 作る
- 53) phi=ka: kumidzima=gatfi idzi taN
船で 久米島に 行ってきた
- 54) kutja=gatfi ikinija nuda=ka: ituN
松田に 行ったら 宜野座を 通って いく
- 55) mukafi=ja so:ro:=ga akatatfi=ka: mitahanu saku=N natotaN
昔は アブラゼミが 暁から うるさいぐらいも 泣いていた

次の用例では、ka:格の名詞がやりもらいの相手をあらわす。

- 56) udzasa=ka: dziN jitaN
おじから お金をもらった

次の用例では、ka:格の名詞が受身の相手=動作の主体をあらわす。このような場合は、nike 格が置き換え可能であるが、話者の内省によると、意味合いが異なるとのことである。詳細は、今後の課題とされたい。

- 57) tu=ka: wararusu maji anaN
人に 笑われること好きではない

11. gare 格

gare が名詞に付く場合、動作の到達場所、または動作や状態がおわる時をあらわす。

次の用例では、gare 格の名詞が到達場所をあらわす。

- 58) kaNna=gare idzi kwe:
漠那まで 行ってこよう

次の用例では、gare 格の名詞が動作のおわる時をあらわす。

- 59) juru <dzu:dzi>=gare <beNkjo:> sa:
夜 十時まで 勉強を しよう

12. tu 格

tu 格の名詞は、相手（相相互作用の相手（60）、関係の相手（61））、共格（いっしょに動作をおこなう仲間）（62）をあらわす。

60) uttʃi: <kutʃo:>=tu itataN
一昨日 区長と 会った

61) kaNnakutuba=ja su:kikutuba=tu kawatoN
漢那言葉は、 惣慶言葉と かわっている

62) kunu kwafɪ=ja jattu=tu maNdena tagidoiwa
この お菓子は 家族と 一緒に 召し上がれ

13. kka 格

kka 格の名詞は、比較の基準をあらわす。

63) e:=ga ja:=ja wa: ja:=kka mageheN
彼の 家は 私の 家より 大きい

まとめ

本稿では、沖縄語惣慶方言を対象として、名詞の格形式体系の記述を行なった。

惣慶方言の 1 つの特徴は、属格が語彙の有生性階層の中の位置により、はだか格か ga 格か nu 格によってあらわされる。表 2 のとおりである。

表 2. 沖縄語惣慶方言の有生性階層と属格形式

	一人称+人疑問詞	一人称複数二人称（単数+複数）	二人称敬称、指示詞（人間も）、呼びかけ名詞	有生物、無生物
	wanu（私）、 saru（誰）	waha（私達）、 ja:（あなた）など	nami（あなた様）、 e:（彼・あれ）、jaka（お兄さん）など	uttu（年下の兄弟）、 wa:（豚）、 ʃima（島）など
属格形式	はだか・語形変化	はだか	ga	nu
例	wa: ja: 私の家	waha ja: 私達の家	nami=ga ja: あなた様の家	uttu=nu ja: 弟の家

もう 1 つの特記すべき点は、nu 格が主格として用いられにくくなっている点である。nu 格が有生性の低い名詞の主格表示として北琉球語群で広く見られる現象であるが、沖縄語諸方言において、主格に ga 格の使用が nu 格の使用領域まで広がった方言もあるようである。このような傾向が沖縄語において普遍的に起こっているかどうかを今後の課題とされたい。

なお、惣慶方言における格助詞 ga が主題助詞 ja や焦点化助詞 ru と共起され、gaja と garu の形式が用いられる。その意味用法の分析も今後の課題とされたい。

注

- 1) 「夫を持って行った」という決まり文句は、「嫁に行った」という意味である。
- 2) *kaikutuba* 「借り言葉」は、首里那覇言葉をベースとする’最大公約数的な’沖縄語のことである。

参考文献

- 重野裕美・白田理人 (2016) 「北琉球奄美与路島与路方言の格標識」『琉球の方言』第 41 巻、pp.119-164、東京。
- 島袋幸子 (2015) 「今帰仁村謝名方言の名詞の格」『琉球諸語 記述文法 I』 pp.200-217、沖縄。
- 當山奈那 (2015) 「琉球語平安座方言の名詞の格」『国際琉球沖縄論集』第 4 号、pp.47-59、沖縄。
- 仲間恵子 (2015) 「恩納村名嘉真方言の名詞の格」『琉球諸語 記述文法 I』 pp.218-230、沖縄。
- 屋比久浩 (1964) 「Studies on the Soke Dialect (2) Derivation of Adjectives」『琉球大学文理学部紀要 人文編』第 8 号、pp.117-123、沖縄。
- Yabiku, Hiroshi (1962) 「Studies on Soke Dialect (1)」『琉球大学文理学部紀要』第 6 号、pp.343-368、沖縄。